

經營者が語る

■下■

企

業

と

戰

爭

ナカシマホールディングス
社を傘下に置く持株会社。1926年創業。48年設立。
資本金1億円。グループ売上高415億円(2014年
11月期)。従業員約1300人。

戦前、当社の工場は岡山市中島田にありました。1944(昭和19)年に陸軍の監督工場となり、上陸用舟艇に使うプロペラを造った。工場には軍服姿の将校が監督官として駐在し、学徒動員で駆り出された子どももたくさん働いていた。人間魚雷「回天」のプロペラも手掛けたと聞いている。

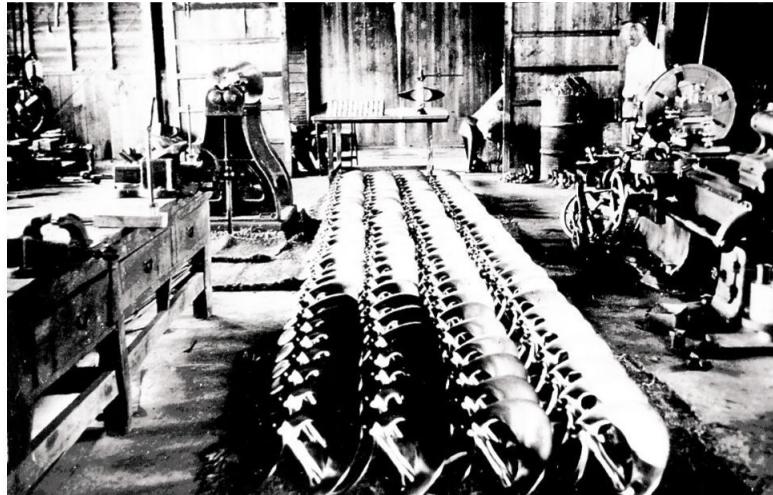
物資が足りない時代。軍に供出された梵鐘(釣り鐘)が全国の寺から荷馬車で運ばれてきた。梵鐘は銅を含みプロペラの原料にするわけだが、工場内の敷地に何十個も並び、不思議な光景だった。

△船舶用プロペラで国内7割、世界3割のシェアを持つナカシマプロペラを傘下とするナカシマホールディングス。起源は26(大正15)年に父・善一氏が旗揚げした鋳物工場。農機具部品を手始めに、漁船向け小型プロペラから軍用の船舶aproべらへと手を広げた。軍の仕事は日中戦争

中島 博会長(84)

(37)後に一気に増えた。当時の私は7、8歳で、夜遅くまで工場の明かりがついていたのを覚えている。関西中学2年だった45年には、学徒動員で岡山市内の呉海軍工廠の分工場に勤務し、食料や物資の調達を担当した。

その年の6月29日未明、岡山空襲で工場が全焼した。敷地内にあつた自宅や寮も焼けた。夜中



上陸用舟艇プロペラを製造していた工場=1942年ごろ、岡山市北区中島田町

大型プロペラで再興

当社は戦時に軍の仕事を請け負い、雇用や財務面で少なからぬ恩恵を受けた。それが戦後はゼロからのスタートとなり、大型プロペラでは後発のため業界内で軽んじられ、いつか見返してやろうと他社にない新技術を開拓していった。

当社は戦時中に軍の仕事を請け負い、雇用や財務面で少なからぬ恩恵を受けた。それが戦後はゼロからのスタートとなり、大型プロペラでは後発のため業界内で軽んじられ、いつか見返してやろうと他社にない新技術を開拓していった。

△戦後、食生活改善を図る国の施策で漁船の建造・修繕が増え、同社はプロペラの生産を再開。博氏は大学を出て55年に入社し、東京で営業の最前線に立った。高度経済成長の勢いもあって船舶用プロペラは受注を伸び、63年には現在地(岡山市東区上道北方)に新工場を建てた。

△戦後70年を迎えるにあたり、この10年は、た社の歴史を含め、多くの人に平和の意義を考えてもうたためにも戦争体験を語り継ぐ大切さを感じている。

ナカシマホールディングス(岡山市)



なかしま・ひろし 岡山大法文学部を卒業し、1955年入社。85年ナカシマプロペラ副社長、2002年会長、08年から現職。岡山県経済団体連絡協議会座長。岡山市出身。

△戦後、食生活改善を図る国の施策で漁船の建造・修繕が増え、同社はプロペラの生産を再開。博氏は大学を出て55年に入社し、東京で営業の最前線に立った。高度経済成長の勢いもあって船舶用プロペラは受注を伸び、63年には現在地(岡山市東区上道北方)に新工場を建てた。

△戦後70年を迎えるにあたり、この10年は、た社の歴史を含め、多くの人に平和の意義を考えてもうたためにも戦争体験を語り継ぐ大切さを感じている。

伊東圭一、内田光祐、橋本直樹が担当しました。